

一九 平假名及び片假名の字源

我が國に漢字傳來以後、我が國人は漢字を我が國語の訓に譯して讀み（「人」を「ひふが如く」、「い」或は表音的に之を讀む「山」を「生」夜末「川」を「加」）など巧に之を利用する方法を案出するに至つた。然るに國民一般が漸次漢字に狎れ、更に進んで之を言語表記の道具たらしめんと欲望の下に或は其の草體を用ひ、或は其の偏傍冠脚を採つて一種の字體を作るに至つた。前者は即ち平假名の起源で、後者は即ち片假名の起源である。

一 平假名字源

平假名はまた草假名、母假名、女假字、女手とも稱せられ、漢字の草體から轉成せられたものである。古來弘法大師の作などといひ傳へられて居るが、何等確實なる論據の存せざるは、諸學者の學說の一致する所である。最初は各人思ひのまゝ、に各種の草體を用ひ、其の上に何等の統一を認め得なかつたのであるが、年月を経過するまゝに、其の中の所謂適者が最後の勝利を占め、それが殆んど決定的の

ものとなり、他は所謂變體假名として或る特種の場合に限り使用せらるゝが如き現象を呈するに至つたのである。今日一般の標準として使用せられつゝある平假名の如き、決して同一時代に於て或は同一人によつて製作せられたものでなく、多くの年月及び各種の人々の手を経て出来上つた共同産物に過ぎぬのである。今普通に使用せらるゝ平假名及び其の變體假名の重なるものの字源を左に示さう。

い、い(以)

ろ(呂) 詠(路)

は(波) と(者) を(盤) へ(八)

に(仁) お(爾) よ(丹) り(耳) ニ(二)

は(保) 不(不)

へ(假字本末)には片假名「へ」の草體であるとして居るが、最近大矢透氏の「音圖及手習考」に「歌考」に「部」の「P」の略體である。其の證には正倉院古文書に物部を「部」、三上部を「三上」と書してある。『遍』

と(假字本末)に「趾」之省止之草取訓とあり、「音圖及手習考」にも字源を止に歸して居るが、後者は止は周代古韻「イ」の韻照母に屬するもので古音は「い」であると論じて居る。

登(登)

ち(知)

ト(假字本末に「片假名之、里、利」)
ぬ(奴、怒)

る(留、類、流)

を(遠、越、字、乎)

わ(和、互、土)

か(加、可、可)「あ、い」の字源が「可」であつたことは昔時「可」の字を頻繁に表音的に

を「ソタ可」と書する如く同じ「可」の字を用ふるのは偶然の一致とも見ようか

よ、ふ、と、與

た(太、堂、多)「あ、い」の字源が「多」であつたことは昔時「多」の字を頻繁に表音的に

又「た」より出でたる一方朝鮮語の吐に「せ、い」を「即大」など「大」の字を用ふるのも見よう

い(類、似、た、現象と)

れ(れ、連)

そ、ろ(會)、み(所)、れ(楚)

つ、け (「假字本末」には「片假名ツ之草變」といつて居るが、此の字は古來頗る難解の字となつて居る。即ち門、關、門、州圖等の諸説あるが「音圖及手習詞歌考」には字源を「川」

に求め、「川」は「ッ」の音であるを論じて居る。)(徒、津)

ね、ふ、禰、ゆ(年)

な、ふ、奈、那、那 (「那」の字源が「那」であつたことは昔時「那」の字を頻繁に表音的に使用し

ら、ふ(良、羅)(羅)

む(武)、ぞ(無)

う、字、于(宇) (「假字本末」には「宇之草變」

ゐ(爲)、井(井)

の、乃、ぬ、れ、能 (「音圖及手習詞歌考」には「乃」の周代古

お、れ、於)

く、く(久)、ぬ(九)、全(具)

や(也)

ま、ま(末)、は(滿)、万(万)

け、け計、々(介、き)遣、希(希)

ふ、や(不、多、希、ぬ)婦

こ(己、古)「古」の字源が「古」であつたことは昔時「古」の字を頻繁に表音的に使用した

るが如く「古」の略體たる「ロ」を用ふるのは偶然の一致と見ることが出来よう尙

「音圖及手習詞歌考」には「己」は周代の古韻では「オイ」の韻であると論じて居る

え(衣、わ)江、盈

て、て(天、て)豆

あ、あ(安、あ)阿

さ、さ(左、は)佐

き(幾、え)支、起

ゆ、ゆ(由、ゆ)由

め(女、免、免)

み、み(美、美)見、三

し、し(之、志)志

る(惠、衛)衛

ひ(比、必、飛)

も(毛)

せ(世)

す(寸、走、春、走、壽、須)

ん(古來「ん」の草體「ん」の變形など)
(いふ説がある)

二 片假名字源

片假名は一に大和假名ヤマトカナとも稱し、漢字の偏、旁、冠、脚等の一部分、又時としては其の全部を採つて作られたもので、五十音と共に吉備眞備の發明に係るものと傳へられて居るが、これまた平假名の如く一時代、一箇人の手によつて作成せられたものでなく、各種の書體中の多くのものより漸次淘汰せられて終に今日使用せらるゝが如き少數の文字を形成するに至つたのである。

今次に普通の片假名及び以前から使用せられた重なる變體片假名の字源を掲出する。

ア(阿偏)

片假名の作
者は吉備眞
備といふ

片假名の字
源

イ (伊 偏の)

ウ (字 冠の、于 (假字本末)「字」之省 或 予)

エ (江 偏の、用ふ)

オ (於 偏の、偏 (オの字源が「於」であつたこととは、昔時「於」の字を頻繁に表音的に使用したことは偶然の一致と見ようか。))

カ (加 偏の)

キ、 (浅 偏の、草書、寸 (寸を用ふ體、訓)

ク (久 偏の)

ケ (介 偏の)

コ (己 偏の)

サ (古 來、神、草、薩、藏、非、散、事の一部を、ヒ (左 偏の)

シ (之 偏の、變)

ス (假字本末)「須之省又按、朗詠集私注衆或作、爪 (假字本末)「衆之省又按、衆古體略といふ説)

セ (世略の草)

ソ (曾略の)

タ (多) (と朝鮮語の吐にも「多」を用ひるこ)

チ (千) (の全畫、訓な用)

ツ (假字本末「川之變體」といつて居る。此の字は平假名の「つ」と同じく「圖門州等の變體である」といふ説がある。尙ほ「つ」の條を參照せよ)

テ、チ (天略の)

ト (假字本末「には「眞假字所用趾之旁止之省用訓」と論じて居る。尙ほ「さ」の條を參照せよ。レ)

ナ (奈省の)

ニ (二、介、介)

ヌ (奴旁の) (朝鮮語に於ても「奴」の旁たる「ヌ」を吐の「ヌ」として用ひる)

ネ (祢偏の) (子「子」の全畫、訓な用ふ)

ノ (乃體の省)

ハ (八畫の全)

ヒ (比省の)

フ (不省の)

へ (假字本末に「反之略音變」とあり、他にも此の説を信する人が多いけれども「音圖及

ホ、マ、小 (保省の)

マ、マ、(末省、) ア (万省の)

ミ (三の全量、則)

ム (牟省の)

メ (女省、訓)

モ (毛變の省)

ヤ (也の「ト」の字源が「也」であつたことは、音註「也」の字を頻繁に其音的に使用したこと
對し「也」の省體「フ」を
用ひることがある)

ユ (古來勇、弓、由等から出た)

ヨ (與省の)

ラ (良省の)

リ (利省の)

一九 平假名及び片假名の字源

二〇四

ル（普通に「流」の省體といはれて居るが、又「留」の異體）

レ（禮「礼」の略體）

ロ（呂の省）

ワ（普通に「和」の省體といはれて居るが、最近或る有力なる説によると、此の象であるのは高野山寫本中に如意輪寺を如意〇寺、又河内金剛寺曼荼羅中に此の〇を直ちに「ワ」と讀ませたのである〇に當るもので圓形）

キ（井の全）

エ（假字本末には「慧」の俗體之省としてあるが、これは「慧」の異體たる「慧」の省體を示すのであらう）

ヲ（平の省）（「サ」の字源が「平」であつたことは、昔時「平」の字を頻繁に表音的に使用したことが、朝鮮語に於ても吐に「平」を發音するが如く）

ン（悉曇摩多體文の空点のから出たといふ説、又片假名「ニ」の變體、又「下略」であるといふ説などもある）

三 参 考 書

以上は平假名及び片假名の字源の大略を説明したものであるが、尙ほ其の詳細を知らんと欲せば、徳川時代以降著作せられた各種の書に涉獵せねばならぬ。其の中代表的作物として吾人の必讀せねばならぬものは、新井白石の「同文通考」、

仲信友の「假字本末」、岡田眞澄の「假字考」、關根爲寶の「假名類纂」、榊原芳野の「文藝類纂」、又近頃のものとしては「假名遣及假名字體沿革史料」（帝國學士院藏版、明治四十二年）、大矢透氏の「音圖及手習詞歌考」（大正七年）等を挙げねばならぬ。